ふるさと資料紹介

＝㊱＝

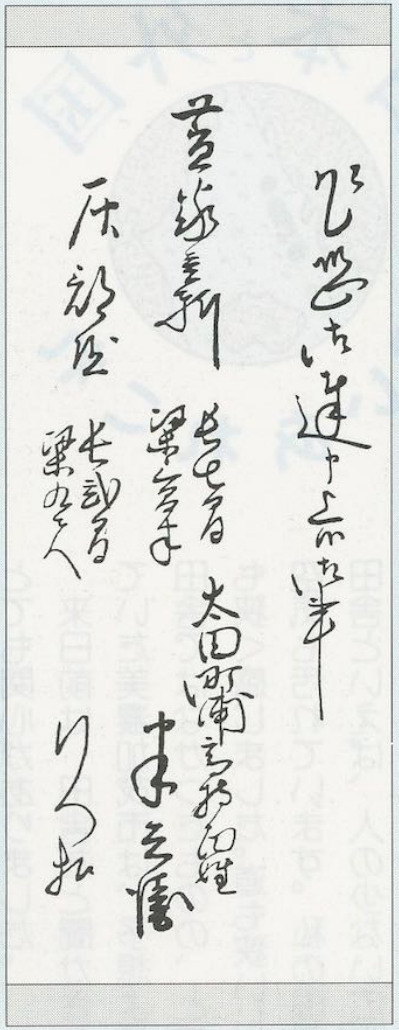
古文書にみる
近世庶民のくらし④

庶民の家の広さ

天明六年（一七八六）の太田の火事の際に、焼けた家（一三軒）の広さが記録されています。

それによりますと、一番広い家が、間口一二・六㍍、奥行六・三㍍です。狭い家は、間口三・六㍍、奥行二・七㍍です。坪数でいいますと、一四～一五坪と三坪です。落語によくでてくる長屋の熊さん、八さんの家が、この狭い方の三坪、つまり九尺二間の広さなのです。一三軒の合計が約一三二坪になりますから、平均は約十坪です。

縄文時代や弥生、古墳時代の家は、大体、直径または一辺が、七～八㍍です。もちろん構造は違いますが、家の広さは三～四千年間そんなに変化がなかったようです。



（福田家文書・部分）

今回は、次の方々から貴重な資料を寄贈いただきました。ありがとうございました。

（平成六年五月分）

○明治期通行許可証など四点
（渡辺勝邦さん／太田町）

○天秤ばかりなど五点
（杉山義量さん／新池町）

○豆腐作り器など八点
（奥村謙さん／蜂屋町）

博物館建設のため各種の資料を収集しています。市社会教育課文化係（内線三六一一）まで情報をお寄せください。